

コモンマーモセット「えむお」の人工保育

京都大学霊長類研究所 人類進化モデル研究センター

○森本真弓, 葉栗和枝, 梅田せつ子, 西脇弘樹, 兼子明久, 釜中慶朗, 宮部貴子, 鈴木樹理

【はじめに】 京都大学霊長類研究所では現在 800 頭あまりの多種多様なサル類が飼育されており、その中でコモンマーモセットは 30 頭近く飼育されている。コモンマーモセットは、体重 200~500g、体長 25~35cm 程度の小型サルで、1 産 2 仔がほとんどだが、飼育下では 3 仔あるいは 4 仔の例が時々みられる。しかしヒトと同様に乳房が 2 つのため、3 仔あるいは 4 仔とも育つ確率はかなり低い。この場合、出産直後に 1 仔あるいは 2 仔を人工保育して育てることが必要となるため、その技術を確立しておくことは、コモンマーモセットの飼育下繁殖のために不可欠のものである。コモンマーモセットの繁殖は、オスとメスを 1 頭ずつ同居させるペア方式で行う。出産後、授乳は母親が、保育は父親が背負って行き、仔は 2 ヶ月くらいで自立する。



2007 年 10 月 24 日撮影(5 週齢)

2007 年 9 月 18 日、所内に飼育されている 2003 年生まれのメスのコモンマーモセットが 3 仔出産した。この個体は約 5 ヶ月前にも 3 仔出産したが、そのうち 1 仔が生後 3 日で死亡しており、親に付けた状態で 3 仔とも育てることは困難であった。そこで今回は、出産当日に最も大きく元気そうな個体を 1 仔選び、その個体を「えむお」と名付け、人工保育することにした。

【方法】 人工保育は夜中も含めて 2~3 時間おきにミルクを与えるのが一般的だが、職員の負担はかなり大きい。そこで「マーモセットの飼育繁殖・実験手技・解剖図解」V 章 育成, 人工保育(哺乳) (谷岡功邦著, アドスリー, 1996) に記載されている方法を参考に工夫して行った。人工保育は授乳と排便・排尿をうながすことが主な作業である。授乳は 9 時から 17 時までの 8 時間に行い、夜間の授乳は行わなかった。生まれてから 1 週間は 4 回(2.5 時間~3 時間間隔)、その後 4 週齢までは 1 日 3 回(4 時間間隔)、8 週齢までは 1 日 2 回(8 時間間隔)、そして 8 週齢以降は 1 日 1 回とした。ミルクはヒト用を与えた。出生日のみヒト規定濃度の 2/3 に薄め、初回は 0.5ml を、2 回目は 0.8ml 与えた。1 日齢には規定濃度として 1 回 0.9ml を 1 日 4 回で 3.6ml 与え、1 日増すごとに 0.1ml/回ずつ増やした。4 日齢から濃度を 1.5 倍とした。6 日齢以降はさらに 1 回当たり 0.2ml ずつ増やし、7 日齢からはヒト用離乳食の添加を開始した。2 週齢よりミルク濃度を 2 倍、3 週齢より 3 倍とした。他に栄養剤やビタミン D₃ も適量ミルクに混ぜて与えた。またミルクや栄養剤などを与える量や時間、担当者を分かりやすく示した表を作成し、日々の様子や与えたミルクの量などをノートに記録した。保育が順調に進んだら、できるだけ早くマーモセットの社会に返すことを目標とした。

【結果と考察】 生後 1 週間、下痢を発生させないことが人工保育を成功させるカギである。この時期には下痢の発生を抑えるため、ミルクの量や回数は少なめが良いとされる。この時期のえむおは、体重はほとんど変化しなかったが、無事に下痢のないまま乗り切った。えむおが初めて下痢になったのはミルクの濃度を 2 倍にした 2 週齢の夕方である。それから 5 日ほど夕方のみ下痢をした。これはミルクの消化不良が原因であると考えられた。体が成長し、ミルクを消化できるようになると、自然と下痢も治まっていた。同様に、ミルクを 3 倍濃度に上げた 3 週齢にも再び下痢が発生した。この時は、その 2 日後からミルク濃度を 2.5 倍に落とし、与える量も増やさず様子を見たところ、約 10 日後に下痢は治まった。また 4 週齢を超えるころからつぶしたバナナやうらごしリンゴなどの離乳食をよく食べるようになり、7 週齢ごろからはバナナやうぐすらの卵をそのまま食べ始めた。さらに 8 週齢前から水やミルクでふやかした固型飼料も少しずつ食べる様になり、10 週齢までにミルワーム(チャイロゴミムシダマシの幼虫)も食べる様になった。11 週齢から授乳量を 2/3 ほどに減らし、15 週齢で授乳を完全に終了した。また 4 週齢ごろから保育器から出して他のマーモセットの顔を見せたり、声を聞かせたりした。その際、えむおに非常に強い興味を示し、格子の間から抱きかかえようとするメスがいたため、この

個体をえむおのサル社会教育係にしようと決め、6週齢あたりから短時間同居を開始した。えむおは、はじめ怖がって逃げ回っていたが、5日ほどで次第に落ち着き、平日の昼間はずっと同居できるようになった。さらに8週齢からは平日の夜も同居させ、12週齢を待たずして週末も含めて完全に同居できるようになった。生後12週のえむおの体重は204.5gであった。この時、一緒に生まれ親に育てられた他の2仔の体重は157.1g、147.3gであり、えむおの方がかなり大きく成長したという結果になった。

【おわりに】 えむおは継母のおかげで無事にマーモセットの社会に返ることが出来た。そして、6ヶ月齢を過ぎたころにお世話になった継母との生活を卒業し、すでに両親と離れて生活していた2頭の兄弟たちの元に戻っていった。それから現在に至るまで、大きな問題も無く、3頭一緒に仲良く暮らしている。

今回の方法で夜間の授乳は省略できたが、休日の職員の負担は大きいものがあった。当施設では休日は当番制で出勤するが、人数が極端に少なく、仕事量や責任も大きい。その上さらに人工保育を行うということは、当番者に大きな負担を強いることになった。この場を借りて、えむおを暖かく見守り、慈しみ、愛情を持って保育して下さった皆様に感謝の意を表したいと思う。本当にありがとうございました。次回はさらにおとなのマーモセットにも協力してもらって、より自然保育に近づけるような人工保育してみたいと考えている。



出生当日



3週齢



11週齢



5ヶ月齢



えむおの父母と兄弟（次も3仔産まれる？）



えむおと継母



兄弟3頭、みんな一緒！

